

田中光顕関係文書紹介(13)

YASUOKA, Akio / NAGAI, Junichi / 長井, 純市 / 安岡, 昭男

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2012-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007764>

田中光顕関係文書紹介（十三）（付）杉原夷山宛田中光顕書翰紹介

安 岡 昭 男
長 井 純 市

はじめに

今回紹介するのは、前回に引き続き田中光顕宛山県有朋書翰（巻六
五）巻六六、「含雪公手牘」、全十四通、完）である。これまで十二回に
わたって紹介してきた法政大学図書館保管「田中光顕関係文書」（以下、
田中文書）の紹介も今回の（十三）で完了する。なお、今回、前号で紹
介したように、新発見の田中光顕自筆書翰五九通の前半を併せて紹介し、
今回紙幅の関係で紹介しきれない同書翰の後半を次号において「田中文
書紹介（十三続）（付）杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」として紹介する
こととしたい。

まず最初に、田中宛山県書翰の概要を紹介しよう。

今回の書翰には、山県自作の和歌が記されている。彼の歌風について
は、すでに本誌第五四号（二〇〇七年三月）所収「田中文書紹介（三）」
において触れたところである。読者諸賢自ら、山県の和歌の世界を味わっ

ていただきたい。

三六六番書翰（明治四一年一月七日）は、不敬罪に関わる内容の短翰
である。詳しい内容は不明であるが、大逆罪にも相当すると山県の考え
る二人の人物が近々横浜に到着するという。これを山県は「打捨置難」
いとして、田中宮内大臣に伝えている。

これに対応する明治四一年一月一三日付山県宛田中書翰がある（尚友
倶楽部山県有朋関係文書編纂委員会〈代表・伊藤隆〉『尚友叢書一三一
二山県有朋関係文書』〈尚友倶楽部、二〇〇六年〉三五三―三五四頁）。
これによれば、二人は「米国より帰り候四人之者」のメンバーであるよ
うである。山県の「過激者輩之事に付御焦慮」に対し、田中は「警保局
長及警視摠「総、筆者註、以下同じ」監之兩人に面接」し、「現今着手
之景況」について説明を受けた。そして、「予防は勿論「中略」罪状荷
も摘発するに足るべきものは收拾して起訴之準備怠りな」しとの判断を
山県に示したのである。さらに、「裁判官に於て証拠不十分とか、無罪
放免と申事」が起きては困るとの懸念を表明しているから、何らかの根

回しが行われた可能性がある。最後に、「巨魁は幸徳秋水に有之」として、同人について「此の者は学問も有之、文章も出来候」と、皮肉なことに、高い評価を下している。この件に関する関係者を「首相、内相及法相等」と記述しているが、この時期、政界は西園寺公望内閣の総辞職問題で揺れており、その動揺の水面下で社会主義者の問題について密かに連絡が取り合われていたのである。

いうまでもなく、大逆事件はこの二年後、明治四三年のことである。山県が、同事件の公判開始を聞いて、その所感を述べた和歌が次のものである（徳富蘇峰編述『公爵山県有朋伝』〈原書房復刻、一九六九年〉下巻、七七六頁）。

天地をくつかへさんとはかる人

世にいつるまで我なからへぬ

明治国家の創設者の一人として、和歌に表現された山県の嘆き（情緒表現）は、前記の書翰から窺われる冷徹な根回し工作（理知表現）とは別人のようである。これを元老山県の表と裏と捉える得るであろうか。

三六九番書翰（明治年不明一〇月一二日）は、田中の「雪冤事件」について、山県が田中を慰撫したものである。これに関連するか否か明確ではないが、田中宮内大臣の流職疑惑については、本誌第五七号（二〇〇八年一〇月）所収「田中文字紹介（六）」において言及した。結局、この問題は疑惑を招いただけで終わった。

なお、この問題については、司法官としての経歴が長く、枢密院議長

を勤めた倉富勇三郎の日記を基に、永井和氏が山県の宮中支配という観点から紹介している（倉富勇三郎日記研究会〈代表・永井和〉『倉富勇三郎日記』〈国書刊行会、二〇一〇年〉第一巻、八八二頁）。それによれば、田中への疑惑は冤罪ではなかったのである。しかし、前記のように、この短翰が良く知られた田中の流職疑惑に言及したものがどうかは明らかではない。

三七三番書翰（明治年不明一月二五日）は、山県を訪れた料亭「富貴楼」の女将との歓楽の様子を示唆する、珍しいものである。その歓楽には、田中のアドバイスが大いに役立ったようである。「ワルイコトヲアハハハ」という女将の言葉が引用されており、山県がふだん決して口にするのではない冗談めいたこと、お座敷という密閉された歓楽の場所での冗談を女将に言ったのであろう。その場の雰囲気伝わってくるようである。田中が山県に教えた「大磯十二笑之高作」とは一体どのようなお座敷ネタであったのだろうか。

三七七番書翰（明治二七年七月二日）は、山県有朋の事実上の後妻である吉田貞子に対する山県の財産分与に関するものである。彼女についても、すでに前掲「田中文字紹介（三）」において言及した。また、明治二一年の洋行に際して、山県が田中に財産目録を送り、その相続について依頼したことも、すでに本誌第五八号（二〇〇九年三月）同（七）において触れたところである。

以上をもって、概略紹介に代えたい。

付記として、今回翻刻した巻六五および同六六所収の書翰翻刻の校正責任者は、当時大正大学のODであった中島英人であったことを記して

おきたい。同人は、その後、病を得て、博士号を取得して間もなく急死するという不幸に見舞われた（博士論文は、その後同大学有志の手により刊行された）。長井が非常勤講師として同大学に出校したのを機に、中島は本学大学院で日本近代史を専攻する院生との交流を深め、共に学び合い、安岡を中心とする「田中文書」の翻刻作業に参加したのであった。今回、最後の紹介となるのを機に、この小さな史実を書き添えておきたい。

最後に、田中光顕関係文書研究会メンバーの氏名を左に記す（安岡・長井を除く。アイウエオ順）。

有山慎也・飯田直輝・出岡学・井上敦・岩壁義光・上田浄・柏木一郎・狩野雄一・川畑恵・斎藤（河原）円・小坂肇・斎藤智志・斎藤理津子・白柳弘幸・鈴木隆春・鈴木宏宗・須永真紀・高沢努・筑後則・土井康弘・冨塚一彦・中川洋・中島英人・野崎雅秀・森口準・山下大輔・吉水暁・渡辺穠

凡例はこれまでと同じである。

* * *

さて、「付）杉原夷山宛田中光顕書翰」前半を紹介する。長井が杉原俊一氏の筆耕原稿を底本とし、原史料の写真版と校合して翻刻し、さらに安岡の校正を経たものである。なお、杉原俊一氏の筆耕原稿とは若干の異同がある。史料翻刻における凡例は、田中文書の場合と同じである。

これまで「田中文書紹介」において触れてきたように、山県と田中は幕末の尊王攘夷の志士として交流が始まって以来、篤い信頼関係を築き、

生涯それが失われることはなかった。

そうした両人の固い絆に関する説明要因の一つとして共通の趣味、たとえば書画骨董・和歌・漢詩・築庭・家作などのいわゆる文人としての結合紐帯が注目される。山県については、内藤一成「もうひとつの山県人脈」（伊藤隆編『山県有朋と近代日本』吉川弘文館、二〇〇七年）、鈴木博之「庭師・小川治兵衛とその時代——はじまりとしての山縣有朋——」（『JUP』第四〇巻第二号、東京大学出版会、二〇一一年二月）等を参照されたい。

政治に関わる信条や理念などハードウェア的な側面に加えて、美学的な感性というソフトウェア的な側面から政治家同士の結合形態を見てみようということである。この点に関して、たとえば小松緑『春畝公と含雪公』（学而書院、一九三四年）は、ソフトウェア的な側面において伊藤博文と山県との興味深い違いをさまざまなエピソードの中に見出している。なお、坂本一登「伊藤博文と山県有朋」（前掲『山県有朋と近代日本』所収）は、ハードウェア的な側面における伊藤博文をトリックスターとして描き出し、山県との違いや両人の競合・協調のあり方を再構成した興味深い論考である。

前述の通り、田中・山県両人は幕末の生死を賭けた局面で、お互いの文人としての側面に深く共鳴し合っていた（澤本健三編『伯爵田中青山』〈田中伯伝記刊行会、一九二九年〉二五〇—二五四頁）。山県の死去後間もなく、田中は売りに出された山県の遺墨を購入しようとしている（大正一一年六月二四日付杉原夷山宛田中光顕書翰。以下、書翰の表記においては発受信者名を省略する）。

これまで注目されることの少なかった田中と山原の結合形態を中心として日本近代史における政治指導者像を再構成できないかと考え、その試みを現在進めている。これに関連して、安岡昭男「明治期田中光頭の周辺」(法政大学史学会編刊『法政史学』第三七号、一九八五年三月)、同「岩倉使節會計田中光頭」(『土佐史談』第二三九号、二〇一〇年一月)、松尾正人「幕末の志士田中光頭と維新政権」(中央大学史学会編刊『中央史学』第三三三号、二〇一〇年三月)は数少ない田中研究の成果といえよう。

さて、上記杉原俊一氏のもとに、ご祖父杉原夷山(以下、夷山と記す)宛の田中光頭書翰五九通(封筒のみの四通を含む。大正七年一月一九日付く同一二年一月二五日付)が残されていることを知ったのは、平成二二年八月一八日付福島民報(電子版)によってであった。

管見の限り、田中の膨大な収集品・史料の移管先には、青山文庫(高知県佐川町)、宮内庁、幕末と明治の博物館(旧常陽記念館、茨城県大洗町)、早稲田大学中央図書館、多摩聖蹟記念館(同館所蔵史料の内、大久保利通・木戸孝允・伊藤博文・山県有朋四者の田中宛書翰〈全六六卷の軸物〉が、財団法人多摩聖蹟記念会と法政大学との取り決めによって昭和六〇年に同大学図書館に保管されることとなった)がある(伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典』〈吉川弘文館、二〇〇四年〉の田中光頭の項〈長井稿〉を参照)。杉原家所蔵史料ともいうべき(資)料群の中の夷山宛田中書翰の存在は、無論、初めて知るところであった。

そこで、平成二二年一〇月二九日から十一月一日まで同地に滞在し、

杉原俊一氏および奥会津博物館のご厚意、ご許可により夷山宛田中全書翰および若干の官僚(籠手田安定ら一七名、全二六通)の書翰を写真撮影させていただいたのである。

すでに、杉原俊一氏により同書翰の目録作成、活字化、記載人物の註記、夷山の略年譜などは完成している。本稿はその恩恵に浴している。

さて、夷山の略歴を紹介しよう。彼は、明治一〇年田島の商家に生まれた。名を幸次郎という。夷山は号である。同三三年に上京し、漢学を修め、書画に関する多数の著作を刊行した文人でもあった。大正六年に書画の販売と雑誌の定期刊行を行うようになり、田中との関係を生じたようである(中行社〈東京市麻布区森元町一の九〉および書画叢談雑誌社〈同町三の九の一二〉という社名が宛名に記されている)。のち昭和一九年、太平洋戦争下、田島に疎開し、死去した(享年六八)。(以下、次号)

山県有朋書翰(その十二)

「含雪公手簡卷六十五宮内大臣時代」

以下、同卷所収の書翰

山364 明治()年1月3日

新禧敬賀 先以老閣万福御超歳欣喜之至に候。今朝蕉庵え参趣候処、一步違ひにて不得拜晤、此に祝意を表し候。

昨夕は御来訪被下候折柄、暫時間散策いたしたる際にて駈違ひ致失敬

候。老生も今午後一時之汽車にて湘南暖地に静養之覚悟に候。昨今寒
威殊之外烈しく御自愛所祈候。余事期拝青可申陳。草々不尽

一月三日

椿山莊主朋頓首

蕉庵青山主人座下

〔封筒〕表、田中宮相閣下、親展。裏、緘、有朋。

山 365 明治（ ）年2月10日

拝啓 昨夜者電報忝落手。先以御拝命為皇室為国家大賀至極に候。老
生も明後日は帰京可致含に付、其節得拝光万縷可申述。草々頓首

二月十日大磯にて

小洵庵主朋

青山老閣座下

〔封筒〕表、東京小石川区関口台町二十九番地、田中宮内大臣殿、

親展。裏、緘、相州大磯、山県朋。

山 366 明治（41）年1月7日

先月廿九日於宮中御内話致し候^{マツ}激文、不敬罪之儀はとふも打捨置難
くに付、老生は近日の中書面相添当局他之意見承可試上存候。今回之
事件に付、其中之者兩人、十二月廿八日横浜着致し候趣に付、渠等は
同志相募り目的を可相達計略を施行致し不申やと察申候。

孰れ猶委細之情況は後日可及開陳候。宮内省之議は確定致し候事と察
候。草々不一

壹月七日

有朋

田中宮相閣下

電車時刻切迫、大乱筆高怒。

〔封筒〕表、田中宮相閣下、密啓。裏、緘、有朋。

山 367 明治（ ）年7月5日

過刻官舎え鳥渡御尋申上候処、草廬に御休養之趣伝承引返申候。若御
さし支無之候へは、夕景迄之中御来訪被下間布や申試候。草々不一

七月五日

椿山莊主朋

蕉庵青山老閣座下

〔封筒〕表、田中青山老台、内啓。裏、緘、有朋。

山 368 明治（ ）年10月6日

先日來御來游頻に相待居候処、東京より屢帰京促し來候付、遂に今夕
出発、帰京に相決し候。然処、昨夜伊東男來庵。伝承候へは、明日御
出発御西下に相決候由、途上行違ひ、いかにも残懷之至に候。京師一
年之好風景、紅樹緑水之間、御逍遙欽慕に不堪候。老生は如此江山之
佳期に背き無情も亦甚御冷咲可被下候。別冊は過日乃木大将携帶、一
覽致し置候様との事に付致一読候。即御返璧御査収相願候。

老生も何と歎工風を礙し^{マツ}霜葉之候、一騎駟にて西游再ひ相試度と存候。
乍去老兄には数句之御滯游は兎角無覚束事歎と察申候。孰れ東西孰れ

之地にて歟得拜光可申候。草々不一

十月六日京都

無隣庵主朋頓首

青山田中宮相閣下侍史

猶、対客中乱毫御推読可被下候。草々

〔封筒〕表、別冊添、田中老台、内啓。裏、緘、有朋。

山369 明治（ ）年10月12日

華簡敬読。爾来倍御清福万賀。

扱、被仰聞候雪冤事件、先日松下生より伝承。土方伯宮相え面談之上は老生よりも旨趣貫徹致候様にと依嘱候付、老生出発に際し、河村に面会之節、同伯より示談之結果事情齟齬無之様にと相考、先以雪冤之事實概略申含め、伯よりの陳弁一貫候様致注意置候。此事件に付而は終始一貫松下生誠意之尽力は御同感に不堪候。玉詠感吟徹骨候。時下御自愛專祈之至に候。草々拝復

十月十二日

古稀庵老主朋頓首

青山田中老兄座下

猶、貴簡中文意半解之虞飛電を以御一報深謝。両三日俗事悩され回答遷延之段高恕。

〔封筒〕表、静岡県岩淵別荘、伯爵田中光顕殿、親展。裏、緘、相

州小田原板橋、山泉朋。

〔内封筒〕表、青山老伯座下、内啓。裏、緘。

山370 明治（ ）年6月11日

拜啓 近来兎角御無沙汰而已に打過候処、弥御清適被為涉候事と欣賀之至に候。

扱、来十四日は老生誕辰に相当致し、老軀残骸不思議にも此高齢に達し、自ら怪しみ且驚くの感なき不能候。家人等の勧めに依り如例年当日小集相催候。就而は老兄にも若し御上京之序も有之候は、御光来如何や。例に依り別に風情も無之事は予め御了承願ひ置候。猶、一昨年御談致候御身上の件に付而は、其後再三当局にも談を試み、殊に昨年未より本年に掛け土方伯とも面談致し、平沼氏にも相計り、宮内大臣えも屢意見を述べて催促致し置候。是等之事情は土方伯より御内報有之候事と察申候。然処、同大臣に於て相当考慮せられ居るは勿論に可有之候へ共、何分遷延致し兎角の返答も無之に付、過日態々面談之上切迫に談議相試、此際充分に考慮を遂げ可能の範圍に於て順序方法を立て可申候と懇々依嘱致置候。此上は同大臣より直接老兄え御相談之事も或は可有之歟と存候。右序を以概要御含まで申添候。時下梅雨之候御自愛專祈。草々頓首

六月十一日

椿山莊老主朋再行

青山田中老伯閣下

鳩杖をたまはりければ

いたゞきし鳩杖のみかその鳥の翅もかりてつかへまつらむ

供一咲候。草々

〔封筒〕表、静岡県下岩淵別荘、伯爵田中光顕殿、親展、「書留」

のスタンプあり。裏、緘、東京芽城台、山県朋。

〔含雪公手簡卷六十六〕

以下、同卷所収の書翰

山371 明治(41)年(1)月(1)日

社頭松

ひとすちの松おもしろき真砂路の洲先は神の社なりけり

有朋

山372 大正(7)年1月2日

新禧敬賀。弥御清適遙賀之至に候。老生も亦越年致し候。元旦及び歳

末共電報を以玉詠を辱し感謝。老生も蜂腰二首左に、

戊午元旦に

西ひかしはせ行駒の姿さへ雄々しくみえて年立にけり

丁巳歳晚

世の為に尽すこゝろは老ほれてそむきたる身もくるゝ年かな

供一咲。昨今寒氣酷烈、御自愛專祈之至に不堪。草々敬白

一月二日

古稀庵老主朋頓首

青山田中老伯閣下侍史

古稀庵にてとの始めに

のとかにもとし立けさの初風は梅のほひとなりけるかな

田中光顕関係文書紹介(十三)

〔封筒〕表、青山田中老兄、袖展。裏、緘。

山373 明治()年1月25日

爾来御清適遙賀之至に候。昨日は都下も白雪皚々銀世界となりたる由、

小ゆるきは未曾有之事に候。

扱、新年之御式より引続き清韓より之貴客着京御滞留にて御繁多不堪

想察候。暫時にても時々御静養所祈候。又先日は大磯十二笑之高作拜

承。尤おもしろく覚候。富貴楼女将罷越候付披露に及たる処如例微笑、

ワルイコトヲアハハハ、殊にめて度覚候。当年之寒氣は稀有之事歟

と被察候。時下御自愛所祈候。草々不尽

一月廿五日大磯

小淘庵主朋頓首

蕉庵青山老兄侍史

別紙腰折両三首供一祭。草々

山374 明治()年9月24日

拜啓 先刻者御来庵被下久しふり緩々高話拜承本懐之至に候。御帰途

之際は生憎至急御用召有之、無抛御見送を不果失敬不啻候。御用向相

済て御かへしのこゝろを左に、

病ひはととひこし君をともなひて庭の流れをけふはめぐりつ

老人病後之情態相顕れ御一咲可被下候。先は謝意を表し候為如此。草々

敬白

九月廿四日

青山田中老伯座下

古稀庵朋頓首

山 375 () () 年 () 月 () 日

雪ふりける日

松風もいそ打なみも静にておとろくはかりつもる雪哉

しら浪のくたくる磯の松の上にしつかなる世の雪はふりつゝ

風たえて雪おもしろき夕へかな恰も花のちるににたれば

などいかにけさは雀の聲のせぬ小米にゝたる雪はふれとも

目になれぬいは山松のひと本もふりなつかしくみゆる雪かな

小淘庵にて

うつせみの世にもしられぬ宿なれと松には風の音つれにけり

ふく風はまた冬なから遠山のあたたかけにもかすむけさ哉

折とりし手ふさにふれて一枝のうめはをしくもちりにけるかな

有朋

山 376 明治 () 年 5 月 7 日

貴翰拜読。満山春色日相加候処、先以老兄万福敬賀。

扱は目白山莊隣地売却之事に付、林翁と御対談之趣逐一被仰聞難有拜承仕候。丁渡老兄之御推考通りにて応答被成下、小生に於ても寸毫之

意見無之御同様相考候付別段貴答不仕候。如貴論南地丈は可相成は手に入度候。事情細縷拜晤を期し可申候。

小生も演習地自喉頭加答留にて、数日を経過するも回復致さゝる故、

帰京後直に当地に脱走、治療相試候所昨今は稍軽快を覚申候。此模様

なれば四、五日相立は帰京可致と相合居候。

此程は小金井え御遠乗之由、数百之連騎駿馬駸々、意気雄々、莊観不

啻事と察申候。蹄塵の為に咳氣相発候由、御加養所祈候。帰途神戸よ

り急行、嵐山に赴き纔二拾分間之花を見旧遊懐起申候。

明日はまた雨とやならん嵐山花にといそく夕暮のみね

など口すさみ帰り申候。当地にては歌も詩もなし。酒も煙草も禁せら

れ治療いたし無風流にも日を立申候。御冷笑可被下。草々頓首

五月七日朝

有朋

田中将軍幕下

猶、令聞え可然御致聲奉憚候。

「含雪公手牘」

以下、同卷所収の書翰

山 377 明治 27 年 7 月 2 日

記

一、電燈株式百株

右は老生死後望嶽楼主貞え可差遺舎に付、老兄證人に御立合置可被下。

山県家財産分割之書面には老兄え依托し置との事を記し置申候。御了

承被成下度候。草々頓首

明治廿七年七月二日

伯爵山県有朋（花押）

子爵田中光顕殿

尚、中山えも一言相話し置申候。是亦御承知可被下候。再白

〔封筒〕表、田中宮中顧問官殿、親展密啓。裏、緘、有朋。

*

*

*

〔付〕杉原夷山宛田中光顕書翰（杉原俊一氏所蔵）

【1】大正7年1月19日

楳岡雪景山水一幀正に落手。

一金參百五拾六円

内六円前回不足分

右小切手を以差出候条可然御取計被下度候。林谷之画は絹と有之候へ

とも紙に有之候間、為念此段申進候也。

七年一月十九日

中行社御中

古谿叟

田中光顕関係文書紹介（十三）

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社御中。裏、七年一月

十九日、東海道岩淵、田中光顕。

【2】大正7年1月23日

南華山水画本日落手。

南山宝剣歌と共に明日代金差出可申候。叢談第二、第三、第四、第六

之四冊何卒御送付被下度候。第五号中之鉄石山水は売品に候哉如何御

示教賜り度候。

長尾秋水は越後村上之人と申事は承り居候へとも其伝を詳にせず候。

人名辞書にも相見え不申候。小生弱冠之時海城寒栢月生潮之詩は頻に

吟誦致候事有之候。此度墨竹を得、大に相喜ひ申候。小生は古書画を

愛翫致候へとも新書画は一向相分り不申候間、偏に貴社を信頼申候次

第に有之候。宜敷御含被下度候。匆々頓首

七年一月廿三夜

光顕

中行社御中

〔封筒〕表、東京麻布区森元町、中行社御中。裏、七年一月廿四夜、

東海道岩淵、田中光顕。

【3】大正7年1月24日

一金四拾四円

一同拾四円

計金五拾四円

右小切手を以差出候間御落手被下度候。南華之歿年を夷山先生は雲烟叢談に四十又一とし、南溪は春木三世談に四十八と記し有之。孰か是なるや御取調被下度候。

七年一月廿四日

中行社御中

〔封筒〕表、東京麻布区森元町、中行社御中。裏、七年一月廿五日、東海道岩淵、田中光顕。

〔4〕 大正7年1月29日

御差越之写真一覽之上返上仕候。十時梅崖之墨梅は買求申度候間、実物一覽希望仕候。

維新前に殉難之士にして書画有之候分所望に候間、大和義挙中に而は鉄石、奎堂、伴林光平（是は多く和歌なり）其外三樹、雲浜等の類、土佐の武市瑞山杯御見当り相成候は、御示し被下度候也。

一月廿九日

夷山先生座下

〔封筒〕表、東京麻布森元町、中行社、杉原夷山先生梧下。裏、七年一月廿九日、東海道岩淵、田中光顕。

〔5〕 大正7年1月30日

要事のみ申上候。

- 一 秋水墨竹 一幅
- 一 南山宝剣歌 一幅
- 一 南華山水 一幅

右三幅の表装御依頼仕度候間少し上等之処に御願申上候。定価表の地位の処にて宜しく候。併而箱も。匆々

七年一月三十日

中行社様

御依頼申上候表装は反り不申様御注意希申候。余り時日を急ぎ候時は其弊有之候間、十分時日を与へ不都合無之様仕度候也。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町、中行社御中。裏、七年一月三十日、東海道岩淵、田中光顕。

〔6〕 大正7年2月2日

拝読。梅崖画幅之件、御入念之至りに候。

瑞山之小品御都合次第為御見被下度候。

秋水之墨竹右之下に少々紙の破損有之候間裝潢之節成るだけ目立たざる様御取繕はせ被下度候。又秋水之小品絹本一覽致度候間乍御手数數送致被下度候。

奎堂之御預かり品は如何なる詩に候哉。時事歟又は花鳥風月歟御示し被下度候。

書画時報何卒此後為御見被下候様御願申上候。此度之中に而、

藤森大雅之咏史七絶 同上蘿巖云々之五絶
右之二幅一応為御見相願申候。匆々

七年二月初二

夷山老台座右

尚々 南華之箱書は南溪に御依頼被下度候。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町、中行社御中。裏、東海道岩淵、古

谿荘。

古谿叟

【7】 大正7年2月6日

鴨崖、奎堂之二幅無事到着。買求度故代金如何程に候哉御示し被下度候。

秋水、天山等之分は未着に有之候也。

七年二月六日夕

青山

夷山老台研北

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉山〔原〕夷山様侍

史。裏、七年二月六日夕、静岡県岩淵、田中光頭。

【8】 大正7年2月10日

拜啓

一 奎堂大小二幅共に購入之事に仕度候に付、随貴諭大の分百三十五

円差出申候。小之分六十八円

田中光頭関係文書紹介(十三)

一天山 九円五十銭
一 秋水 二十八円
一 三樹 七十五円

〆五点。金三百十五円五十銭。

右小切手を以差出候間、御受取之上御報賜り度候。

一 佩川

一 船山

一 鉄石

一 春濤

右四幅は御返し申候。

改而申進候。総而片道の入費は小生負担、片道は御社之御引受に致度候。不然而は勝手に往復出来不申候故也。電報も同様当方自之分は無

論小生の担当也。万一御返却相成而も受取不申候間、此段御承知可被

下候。

七年二月十日

光頭

夷山老台座右下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原夷山先生侍曹。

裏、七年二月十日、東海道岩淵、田中光頭。

【9】 大正7年2月12日

略陳 書画時報正に拜受仕候。

今後は書画時報イ号とか或はハ号とか申番号を付し幅へも同様一号、

二号と付せられたし。然らざれば趙陶斎の山水とか電文長くなりて困り候。

イ号の一といへは山田方谷、同二といへは東澤瀉「瀉」と申事分明にて無益の費用も入らぬなり。老婆心申上候。玉翁の墨竹も一応為御見被下度候也。

二月十二日

光頭

夷山先生座右

先日は貴著宝典御恵与不堪感謝候。恨むらくは三樹之詩中に誰題日本古狂生之辞世之作をおもらし相成候事を。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原夷山先生座下。

裏、七年二月十二日、東海道岩淵、田中光頭。

【10】大正7年2月17日

紅蘭、詩仏、岳陽、澤瀉「瀉」之四幅一応御返し申上候。

趙陶斎、磬牙之二幅は購入仕候間、別紙小切手差出候条御収手被下度候。

可成は殉難者か又は慷慨家に而気節のある人の書画を好み候間御承知置被下度候。勿々

七の二の一七

光頭

夷山老台梧下

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、夷山杉原先生侍曹。

裏、七年二月十七日午後、東海道岩淵、田中光頭。

【11】大正7年2月19日

□□□「破損により判読不能、以下、同じ」米華画帖□二品購入仕候間、別紙金参拾参円小切手を以差出申候。御落手被下度候。□□□□は正確真物と申事は愚眼にも相分り候得共□は詩が格別面白く「以下、数文字分破損により判読不能」平仄か如何とか十分気に入り不申点も有之候間返上仕候。誠に気の毒に存候へとも不悪御承知被下度候。先頃之三樹も今少し晩年の書にて趣味深き詩有之候は、尚又一覧仕度候。天山も同様七絶中に同字杯も有之候間転句も甚不面白候間是亦以上之品有之候は、為御見被下度候。実は本年戊午之歳にて六十一年前大獄之事杯想ひ起し候に付当時君国の為に縲綏に罹り候烈士之遺墨蒐集仕度との微意も有之旁普通儒者之書画よりも前文之方を希望仕候。心事御諒察被下度候。

一 大橋訥庵

一 藤田小四郎

等の分も御見付次第一覽相願申候。藤田のは筑波山麓の旅館に頗る尤物有之。□年一見、垂涎難禁候。其節懸合候へとも売らぬと申事に而失望仕候。勿々頓首

七年二月十九日

古谿叟

夷山老台研北

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、夷山先生座下。裏、

大正七年二月十九日、東海道岩淵、田中光顕。

夷山老台座下

「封筒」表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉山「原」夷山先生

座下。裏、七年二月廿三日、静岡県岩淵、田中光顕。

【12】 大正7年2月20日

一昨日差出候書面に竹外と相認め候筈之処を誤而聾牙と書き候様に相
覚え申候。右は全く間違に有之候間宜敷御承知被下度候。竹外廿円、
米華十三円に而合計金三十三円と相成申候。

先達而御依頼に及置候表具出来之上は其後之分少々装潢御頼仕度と存
候。為其勿々頓首。不具

七年二月廿日

光顕

夷山老台座下

「封筒」なし。

【13】 大正7年2月23日

一 金廿七円 聾牙

陶斎代

右二月十七日に、

一 金廿三円 竹外

米華代

右同十九日に、

小切手を以差出申候。最早御落手候事と存候へとも為念御尋申上候。

七、二月廿三日

青山

【14】 大正7年2月26日

一 南華 山水 一 南山 詩

一 秋水 竹石

右三幅表装出来に付御送付被下正に落掌仕候也。

一 燕石及東湖之二幅は必御送り被下度候。

一文晁、静軒等之表装も以前之分と同様に御願申上候。

雲浜は小生曾て所蔵の処友人に与え候而残念に存じ居申候。寧死猶聞
俠骨香之一行物にてありし。

鉄石も明治の初年には五、六円も投し候へは優等の品夥多ありしも近
来のは十中の中迄贗作には恐れ入候。精々御審定の上真物も候は、御
世話被下度候。燕石の事は高杉東行より承りたる事も有之、一度面会
致度と存居候処不幸物故いたし遺憾之至候。

板倉筑前介（後に淡海槐堂と云う）

右の画は随分世上に有之候事と存候。此の人は明治に至り死去候。人
名辞書中にも無之候。誠に氣の毒に存申候。小生は一幅画竹を蔵し居
申候。

今後書画採蒐の為に当地方御経歴之折には一度御枉車相願度候。貴社
は小生信賴致候間何事も無御心置相願候也。

七の二月廿六日

青山生

夷山老台楮下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原夷山老台座下。

裏、七年二月廿六日、静岡県岩淵、田中光頭。

【15】大正7年2月27日

第二年第一号

乙骨耐軒 横二尺 縦一尺 絹まくり 八円五十銭

第二年第二号

龍草廬 巾八尺五寸 長二尺一寸

紙絹ともあり孰れか是なる。箱付 廿八円

同

加藤桜老 七絶紙半切 箱付 五円五十銭

以上三点、御有合に候は、為御見被下度候也。

先日之表装至極結構に而氣に入申候。然に一文字の色白き故紙中を黒く見するの嫌あり。今後は薄茶か又は薄鼠色に願ひたし。勿々

七の二月廿七日

古谿叟

夷山老台吟案下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原夷山様侍史。

裏、七年二月廿七日、東海道岩淵、田中光頭。

【16】大正7年3月12日

先般之半牧は至極善品に有之候。然に故山岡米華所藏之山水及岡山喜三氏所持之山水二幅は一層絶品と存申候。山岡は先年死去致候に付何とか遺族へ御着手は出来不申候哉。小生自と申候而は五十円のものを買取不申而は不相成訳に付手出し出来不申候。訥庵之七絶書は確に真蹟に候得共印は三顆ともに後人の押捺するものに有之候。誠に惜しき事に候。此節は印を抜く事上手に出来候由に承り申候。若し見事にぬけ候は、買求度存候間よろしく御依頼仕候也。

七の三月十二夜

古谿叟

夷山人座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、七

年三月十二夜半、静岡県岩淵、田中光頭。

【17】大正7年3月14日

十三日之朶雲拜見。陳者竹外、芳山懷古之詩及香坡、光平等之遺墨も御交渉中之由折角御獲得之期を相待ち居申候。大雅は真蹟一点之疑も無之候。忍向も至極宜しく候へとも春の枕詞にかゝる衣を用候事珍らしく存候。古来の作例如何哉と存候に付一応取調度存候間暫時御猶予相願候。決して他人には見せ不申候間、其辺は御安心被下度候。訥庵は印章に異議を發し申候。是は印刷に而製し候肉の様に被存候。十分に御研究相成度候。書は全く訥庵に相違無之候。書外在後鴻。勿々

七の三月十四日

夷山先生座下

青山

秦鼎書 六円

雲華 蘭石 廿四円

〔封筒〕表、東京麻布区森元町、中行社、杉原夷山様。裏、七年三

月十四日、静岡県岩淵、田中光顕。

斎藤拙堂 移竹之詩 九円半

草場船山 竹 七円半 上に五絶あり

山田方谷 七絶 十八円半

詩仏 竹 六円半

右九幅二口合計十四幅御有合せ候は、乍御手数御送付被下度候也。

【18】 大正7年3月17日

忍向の短冊に付御歌所へ問合せ候処別紙之通申来候間、大雅十六円と
二幅買入候事に仕候。仍而代金八拾四円小切手に而差出申候。御落手
被下度候。訥庵之分は先便申上候通り印を抜く事出来候は、三十五円
に而買収可仕候得共至難に候は、乍遺憾見合せ可申候。勿々

七年三月十七日

中行社夷山様

〔封筒〕表、東京麻布区森元町二〔一〕の九、中行社、杉原夷山先生

光顕

座下。裏、七年三月十九日、静岡県岩淵、田中光顕。

夷山先生侍童

尚々 本日は日曜日にて銀行閉鎖中故小切手に明日差出可申候也。

【20】 大正7年3月21日

〔封筒〕表、東京麻布区森元町二〔一〕の九、中行社、杉原夷山先

〔封筒〕表、東京麻布区森元町二〔一〕の九、中行社、杉原夷山様。

生侍曹。裏、七年三月十七日、田中光顕。

裏、七年三月廿一日、静岡県岩淵、田中光顕。

〔註〕 封筒のみ、書翰本文なし。

【19】 大正7年3月19日

一、二、三、二七、七

【21】 大正7年3月22日

右五幅先頃の時報中にある齧牙の墨竹 六円の口

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、七

乙亥新年

年三月廿二日、東海道岩淵、田中光顕。

富取芳斎 山水 五円

【註】 封筒のみ、書翰本文なし。

谷口藹山 同 九円半

田中光顕関係文書紹介(十三)

【22】 大正7年3月27日

記

一 金八拾六円 竹石

一 同参拾四円 半香

一 同四拾八円 三樹

右三幅御譲り受け仕候。

一 雲泉

一 鉄石 不良

一 芳斎

右三幅は一先返上仕候。奎堂之パリパリもの拝見相待居申候。

右御返事速に可申上候処来客続きにて大延引相成申候。不悪御寛恕被

下度候。匆々

七年三月廿七日

光頭

夷山老台座下

三樹はしみ抜きの上、上等之表装御依頼申上候也。先達而之表装はまだ出来不申候哉。

〔封筒〕 表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原夷山様。裏、七

年三月廿七日、東海道岩淵、田中光頭。

(以下次号)